

国連軍縮週間「市民のつどい」で写真展開催  
超特大パノラマ写真やカラー写真を展示

(公財)長崎平和推進協会は  
国連軍縮週間(10月24日、  
30日)の行事の一環として、  
10月25日(土曜日)に長崎  
原爆資料館階段下広場で「市民  
のつどい」を開催しました。こ  
の行事に写真資料調査部会も  
協力し「ナガサキ原爆写真展」  
を開催しました。会場には特大  
パノラマ写真や、今年6月、ア  
メリカ国立公文書館で収集し  
た長崎原爆カラー写真20点  
余り出品。これらは、被爆70  
周年に向け部会が収集してい  
る貴重な写真の中から厳選し  
たものです。

展示写真の目玉は幅5.4メ  
ートルの超特大パノラマ写真  
です。この写真は林重男という  
長崎原爆の実相を最初に調査

した科学者グループの一員が  
撮影したもので、現在の長崎原  
爆資料館の高台から原爆落下  
中心地、城山方面の69年前の  
惨状を写した長崎原爆の代表  
的なパノラマ写真です。写真展  
会場から城山小学校方面を見  
ますと、当時の惨状と、復興し  
た現在の光景を比較すること  
ができる貴重な写真です。大阪  
府堺市から訪れた被爆写真に  
関心がある女性は、「こんな大  
きな判りやすい写真を堺の人  
たちにも見せてやりたいです  
ね、69年前の惨状がよくわか  
ります。」と語り、またある市  
民は「こんな大きな写真はどこ  
で作るのですか、どんなして作  
るのですか?」と素朴な驚きの  
質問をした人も多数いました。

この他に今年、アメリカ国  
立公文書館で収集した長崎  
原爆カラー写真20点も展  
示、この写真は今年8月に国  
立長崎原爆死没者追悼平和  
祈念館で初めて公開しまし  
たが、「市民のつどい」には  
多くの市民が来られるとい  
うことで再度の展示となり  
ました。

「市民のつどい」が催され  
たこの日は秋晴れの上天気  
で、多くの市民が訪れました  
が、午前中は外国人観光客の  
姿もみられました。多分、長  
崎港に客船が入港したため  
とみられますが、台湾からの

観光客も次々に長崎原爆資料  
館を訪れ、「ナガサキ原爆写真  
展」でも足を止め熱心に写真  
に見入っていました。写真の  
解説を部会員が通訳を通して  
行いましたが、人気があった  
のは深堀部会長です。被爆体  
験を通して写真の説明を行う  
深堀さんに台湾の人たちは感  
激したのか、説明が終わると  
次々に深堀さんと一緒に原爆  
写真をバックに記念写真、そ  
の数20人位いたでしょう  
か。苦笑いしながら深堀さん  
は、入れ替り立ち替り写真に  
納まっていました。この日の  
人気ナンバーワンでした。



(写真上) パノラマ写真も展示した写真展会場 (中) 台湾の人に人気の深堀部会長 (下) 幅5.4mの超特大パノラマ写真

## 捕虜収容で長崎港に入った 米軍病院船へブン号 関連写真

今号で紹介する写真は、太平洋戦争で日本軍の捕虜となり、九州各地に収容されていた連合軍兵士の引取りのため、長崎港に入港した病院船へブン号（ヘイブン号）等の連合軍艦船関係の写真です。

敗戦から一か月も経たない昭和20年9月11日に、捕虜収容のため長崎港出島岸壁に接岸したのがへブン号等を中心とする進駐軍の艦船群です。今年6月に行ったアメリカ国立公文書館での写真収集作業で、およそ2千点の長崎原爆写真を入手しましたが、この中で新たにへブン号関連写真20枚余りが加わりました。出島岸壁に接岸している

のは病院船へブン号と同型病院船サンクチュアリー号の二隻、船体中央と煙突に大きな赤十字のマークが描かれています。また同時に入港し港中央に沖止まりしている空母グループ・グロスターの写真も見つけられました。

昭和20年9月14日の長崎新聞(当時)は、「米艦船長崎に入港 在九州『連合国将兵』引取りのため 約三週間滞在予定」の見出しで次のように報じています。(旧漢字は常用漢字に変更)

「連合国側艦船は九州に於て

解放された約一万余の連合国軍将兵(俘虜ふりよ)引取のため、病院船へブン号ほか輸送船を中心に巡洋艦一隻、駆逐艦三隻、空母一隻等をもつて十一日午後

長崎に入港、へブン号は同日出島岸壁に

係留した。

同艦船の入港に先立ちアメリカ第6軍附属俘虜受取委員長ヴィフエン大佐、同第五軍軍医部長らの一行が来崎、永野知事、谷口要塞司令官ら地元軍官代表と会見、種々要求事項を傳達し、全九州の俘虜引取りに関し協力を要請した。

同艦船は完全に俘虜を収容後、出港するが、約三週間を要するものと見られる。なほ入港艦船の連合軍将兵は、当分公用以外は一般外出を禁止され、岸壁を中心とした出島地区の一部を歩哨により一般交通を禁止、地方民との直接折衝を避けている。」

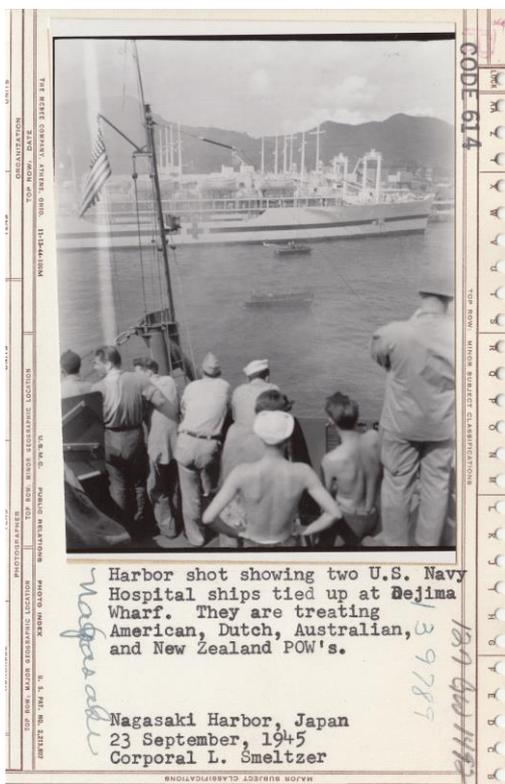
また出島岸壁に接岸中のへブン号を取材した長崎新聞(当時)記者は、

「病院船へブン号、及び輸送船を中心とした連合軍艦船が十一日の午後、突如長崎港に入港した。星条旗をマスト

にはためかせた初めて見る連合軍の艦船、：白黒に塗った綺麗な病院船へブン号、横付けされた出島岸壁に一步踏み込んでアツと驚いた。戦時中の出島岸壁を記者は知っている。いやその昔の大陸往来華やかりし頃の出島岸壁を一番よく知っている。その岸壁が見違へるやうに清掃されて塵一つないほどピカピカと光っているのだ、かつてこんな様子の岸壁はみななかった。

ヴィフエン大佐が本部を置いている市港湾課の建物も磨き立てられて蠅一匹いないといふ有様、おまけに岸壁の一部には横付けの病院船から直接パイプを引いて何百人分のシャワー装置が完成している。これが入港後全一日を経過しない時間の所産だと思へば、なるほど能率的な米兵だ。」と報じています。

(次ページへ)



Harbor shot showing two U.S. Navy Hospital ships tied up at Bejima Wharf. They are treating American, Dutch, Australian, and New Zealand POW's.

Nagasaki Harbor, Japan  
23 September, 1945  
Corporal L. Smeltzer

国立公文書館に保存されている写真原簿の一枚。サイズはほぼA4サイズ。上に写真、下に説明文が記されている。



長崎港中央に停泊する空母ケーブ・グロスター。空母右側にも軍艦が停泊している。



出島岸壁に接岸した病院船ヘブン号と同型のサンクチュアリー号。バックの山は彦山と金毘羅山。



空母から見た出島岸壁接岸の病院船2隻。



長崎港には各種の艦船が停泊。

長崎原爆資料館と写真資料調査部会が新たに入手した病院船ヘブン号（ヘイブン号）関連写真20点余りの一部は次のような写真です。

ヘブン号の長崎入港に関しては同乗してきた写真・映画班が16ミリ映画によって克明に長崎の街並み、特に港周辺の様子を撮影しています。終戦後、米軍が組織的に撮影した初めての映画、スチール写真です。昭和20年9月1日にヘブン号は香焼の島影、三菱長崎造船所立神船台

を延々と撮影しながら入ってきます。おそらく兵士たちはこの船台が戦艦武蔵を建造した造船所と知って撮影したのでしょうか。接岸直前には、艦上から見た旧香港上海銀行、長崎港駅の駅舎（長崎駅の次、出島岸壁にあつた上海航路の乗り換え駅）、遠くに彦山と愛宕山も写されています。

9月12日になるとカラーフィルムにより、範囲を広げ撮影しています。映像の最初に写されているカチンコ（映像説明）には「COMBAT

PHOTO UNIT」  
「NAGASAKI ARRIVAL」  
「Dr. R. Brown」と記されており、香焼の捕虜収容所の映像では「Prison of war Camp NAGASAKI」と記されており、迷彩色に塗られた収容所建物、中庭には兵士たちの洗濯物が干され、笑顔の兵士が禪スタイルで写っています。

写真資料調査部会が所蔵しているヘブン号関連写真は16ミリ映画と同じ早い時期に撮影されたもので、出島岸壁に

はヘブン号一隻のみが停泊しています。撮影者は米軍兵士J・カニングハム氏、寄贈者は大村出身でカニングハム氏の知人・浦垣初朗氏、平成2年に長崎市に寄贈されました。これらの写真では出島岸壁・長崎港駅に列車で運びこまれる兵士たちが写され、収容された兵士たちは素っ裸にされた看護婦たちによりDDTで消毒される風景、また重症の兵士は担架に乗せられ船内に運び込まれる姿もあります。

今年6月の米国国立公文書館の収集調査活動では、2千枚余りの写真が見つかり、大きな成果を上げましたが、16ミリ映画に残る映像を見ますと、まだまだスチール写真としては未発見の映像がかなり、米国のいづこかの施設に残っているとされます。継続して収集調査活動ができればと思います。

なお写真資料調査部会ではアメリカ国立公文書館で収集した写真を長崎原爆資料館と協力して、写真の解析を本格的にスタートさせました。

# 地元記者団が捕虜收容船責任者と会見 “日本を占領、拘束する意思は毛頭ない”

当時の長崎新聞（昭和20年9月14日）を見ますと、出島岸壁に接岸したヘブン号（或いは別の艦艇）で、地元新聞記者団が第6軍附属俘虜受取委員長ヴィフエン大佐と記者会見を行っています。

記者団「当地における軍官民は出来るだけ貴官等の目的遂行に協力する意図を有しているが、今迄の当地における交渉経過を通じて何か要望されることはないか。」

ヴィ大佐「政府及び当地の

記者団「すでに連合軍が進

駐している地方で、一部事故が発生している事実が伝えられているがどう思うか。」

ヴィ大佐「我々は仕事を急ぐあまり、そこに多少の摩擦が生じ、また一方には言葉の不自由なために行違いが生じているのだと思ふが、連合軍側では決してこの種事故を好むものではない。当地等でも問題が起こった場合、あくまでも当方で責任を取り、すべきは厳重処罰する方針である。日本国民は冷静に行動していただければよい。無用な怖れなどを抱かぬやうに、特に新聞を通じて徹底させて戴きたい。」

記者団「長崎は戦前、世界的な観光都市として知られていた。この長崎の復興に対して何か意見があるか。」

ヴィ大佐「個人的な意見を申し上げる自由を持たぬが、明朗な昔の街に再建して戴きたい。そして良い意味における自由な文化都市を実現して戴きたいと考える。」

記者団「最後に日本の再建

についてはどう考えられているか」

ヴィ大佐「歴史ある偉大な国ニッポンが、再びその偉大さを取り戻されるよう願って止まぬ。連合軍側は既にポツダム宣言によって日本再建の方途を示している。日本は決して隷属的なそれではない。立派な独立国家としての将来がある。現在の日本国民に望みたいことは、冷静に最善を尽して平和的国家再建に努力して戴くことである。我々も今後、日本に学ぶべきところは率直に学ぶつもりである。日本国民も進駐して来たアメリカ軍人の善い点を学び、悪い点を捨て、真のアメリカ人を、またアメリカ人の生活を認識して戴きたいと思ふ。

誠にをこがましいが最後に自分は連合軍を代表して言ひたい。日本国民は連合国が抱く正しい理念を把握して、進むべき道を正しく進んでもらひたいものである。」

（担当・堀田武弘）



出島岸壁から上陸するアメリカ第二海兵団兵士2万5千人。  
（昭和20年9月24日）



大波止付近を行進する進駐軍兵士たち。

（右2点は写真資料調査部会所蔵）



艦上から音楽隊演奏を聴く收容された兵士たち